中島子玉

戦国時代から幕府律令体制へと変遷し、江戸中期になると、優秀な官僚（士族）の育成の必要に、幕府も地方の藩も迫られてきたという事情。

元和偃武と呼ばれる平和な時代になり、有能な人物の多かった初代戦国大名から世代交代をしていく中、徐々にリーダーの素養が落ちていき、官僚組織で幕府や藩を運営していくために、新しい人材を育成し、登用する必要が高くなってきたのである。

そこで、地方では藩学（藩営の学校）、幕府では昌平黌（今の東大の前身となる幕府学問所）などを整備し、そこで身分にかかわらず、有能な人材を掘り出し、優秀な官僚に育成する教育システムが作られてきたのである。

子玉は、佐伯藩の四教堂という藩校で学び、下級士族であった父親の身分にかかわらず、その優秀な才能が認められて、メキメキ頭角を現してきたのである。

佐伯藩の文教環境は、六代藩主高慶の時代に、江戸より学者を招聘し、藩士に「大学」という講義を受講させたことが事始め名なる。

幕府では、湯島天神の境内に、五代将軍綱吉が孔子廟を建造し、

そこを江戸幕府の学問の聖地とし、やがて江戸だけでなく、地方の優秀な若者を集めて学ばせた学問所を設けた。

このような人材育成に、学問をする環境を提供する考えを持った綱吉に、傍小姓として仕えていた毛利高慶は、佐伯藩でも学者の講義を通じて人材育成をしていくという文教施策を、歴代藩士の中で初めて取り組んだのである。

八代藩主高標は、祖父の高慶を尊敬しており。自ら幕府の中で学者大名と呼ばれるほどの学問好きで、大財を投じて長崎より渡来の書籍を購入し、その蒐集は八万巻に及び、「佐伯文庫」と呼ばれる日本でも有数の蔵書を誇る人物であった。

その蔵書の一部が、教科書として提供され、設立された藩校が「四教堂」である。

四つの教えとは、文（学問）行（徳行）忠（忠実）信（誠信）であり、優秀な藩士育成の場所として、初代教授に、日田の広瀬淡窓の恩師であった松下筑陰を招き、その指導にあたらせた。

ちなみに、広瀬淡窓は 14 歳のおり、恩師の筑陰を慕って、佐伯に四か月滞在して四教堂での師匠の教鞭姿を身近にみて、その後日田に戻り、自ら塾頭として咸宜園を開いたことは知られている。

その後、その咸宜園に、四教堂で抜群の成績を収めた子玉は留学を許され、淡窓のもとで親しく学んだが、その才能は咸宜園の中でも人一倍抜きんでていたため、一年後には淡窓に代わって生徒に講義をすることが許され、若くして副塾頭の役を果たすようになった。

日田で学ぶ間のエピソードで有名なことは、京より九州遊学の旅に出ていた日本を代表とする学者の頼山陽が淡窓を訪ねたおり、子玉と出会い、その才能に驚き、帰京後に「我、九州を訪れて三絶を見たり。ひとつは長崎の出島、ひとつは耶馬渓の一目八景、そしてもうひとつは中島子玉と言うまれにみる秀才、逸材である」という言葉を残している。

ちなみに、それまで山国渓谷と呼ばれていた場所を、耶馬渓と名付けたのは頼山陽であり、いまもその地名が続いている。

頼山陽が驚愕した子玉の才能は、とくに詩才であり、日田では何度も咸宜園の有志と集まり、詩作の宴を開催しているが、その際に披露した子玉の詩は、詩情溢れ、また漢詩に必要な技術も極めて優れ、その溢れんばかりの才能に驚き、またよほど楽しく感じたのであろう、何度も九州の旅の途中に日田に立ち寄り、淡窓も自分が目的ではなく、子玉が目的で訪れていることを察し、体調不良を理由

に淡窓自身は詩作の宴に欠席し、子玉を出席させたことが記録に残っている。

　その後、佐伯藩では子玉の学才を確かなものにし、やがて四教堂の教授職を任せることができるため、幕府の学問所、昌平黌に藩費留学をさせることにした。

　昌平黌でも、その学才は極めて秀でており、とくに詩作の講義は、幕府学問所ではあったが、そこで講義をすることを許されたほどであった。

　また、この留学期間に、学問所内で刃傷事件が起こった際に、寮監を切り殺し、理性を失い刀を振り回している犯人の学生を取り押さえ、捕縛する手柄を立て、幕府より報奨金を貰う栄を受けており、その知らせは、淡窓や頼山陽、佐伯藩にも聞こえ、大いに喜ばれた。

　その後、佐伯藩に呼び戻され、24 歳の若さで、四教堂の教授に就任。長崎や京都への学問の旅なども重ねつつ、佐伯藩士の人材育成に取り組んだが、34 歳の春、庭先での小さなケガから破傷風となり、短い人生の終焉を迎える。

辞世の詩

高情自與世人違

我是南豐一布衣

三十六鱗猶欠二

今朝天上化龍飛

高情　おのずから　世人と　たがう

われはこれ　南豊の一ふい

三十六りん　なお　二を欠けども

今朝（こんちょう）天上へ　龍と化して飛ぶ。

高い志は人に負けず生きてきたとはいえ、自分は佐伯に住む普通の人間に過ぎない

鯉は３６の鱗があるといわれているが、その鱗の数にふたつ足りない３４歳で、今朝は龍となって天に昇るのである

墓碑銘　淡窓作（現代語訳・宮明）

・桃のごとく、スモモのように、甘く薫り高く、きらびやかで、あでやかで、なまめかしき誌を作る才能を持った子玉よ。あなたの作った詩は、風起こし、青海原を渡って紫の波を巻き起こす力を持っていた。あなたの書いた文は、不思議なほど珍しく怪しささえも感させる。しかし、残念ながら天は君に誌の才能は与えたが、長寿を与えてはくれなかった。みんな、ひとしくあなたの死を惜しんでいる。突然の悲しい知らせは痛恨の極みである。残した作品は数えきれないが、それを棺におさめることはしないでおこう。なんとなれば、子玉よ君はまだ私たちの中に生きているからだ。